

熟議開催報告

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議

熟議 2012 in 富山大学

「災害が起きたらどうする？」

開催主旨

今回の熟議では、2万人に近い死者・行方不明者を出した3.11東日本大震災等の教訓から、災害が起きたらどうするのか、できるだけ具体的なビジョンを描いて対処する必要があり、地域の知の拠点として富山大学がどのような役割が求められ、日頃から、地域社会と共生・協働関係を構築させていくのかを災害被災地・被災者支援の現状を踏まえつつ、参加者と共に考えます。この成果は富山大学にとどまらず、「災害」をテーマに据えた観点から地域と共生する大学づくりに示唆を与える住民参加型の協議の場となることを目指しました。

実施概要

- 日時：平成24年7月7日（土）10：30～17：00
- 場所：富山県民会館 3F 304号室（富山市新総曲輪4-18）
- テーマ「災害が起きたらどうする？」
サブテーマ
 - 「地域を考える」
町内会・PTA活動や市民・行政・高等教育機関との協働等について考えます。
 - 「支援活動を考える」
ボランティア・NPO等による支援活動と高等教育機関との協働等について考えます。
- 熟議参加者 81名、 スタッフ等関係者 11名 【合計92名】
以下参加者内訳

ファシリテーター	8名	公民館・町内会関係者	16名
行政関係者	14名	学生	12名
防災関係者	5名	ボランティア・NPO関係者	2名
その他	16名	文部科学省職員	4名
富山大学関係者	4名		
- 関係機関
主催：文部科学省、富山大学
協力団体：NPO法人日本ボランティア活動推進機構
後援：富山県、富山市、高岡市、社会福祉法人富山県福祉協議会
特定非営利団体法人富山県民ボランティア総合支援センター
- 協力機関
富山県、富山市、高岡市、社会福祉法人富山県福祉協議会
特定非営利団体法人 富山県民ボランティア総合支援センター、富山県民生涯学習カレッジ
富山県公民館連合会、富山市社会福祉協議会、富山市立芝園小学校、富山市五福公民館
富山県広域消防防災センター

以下、『地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議「災害が起きたらどうする？」報告書』より一部抜粋して掲載。

熟議報告書「巻頭言」より

地域連携推進機構生涯学習部門長 竹内 章

「学ぶ」ことで人間性は豊かになります。郷土の姿と歴史を知り、新しい知識に眼を開き、先人の知恵に習う。芸術作品に触れ、体を動かすことの心地よさを感じ、自分と世界のつながりを新たな眼でとらえる。これらのことは真に豊かな生活を創りあげることにつながります。その一方、現代の科学技術は刻々と進歩しており、どのような職業の人でも知識と技術の不断の吸収が求められています。また、資源の枯渇や環境変化をはじめとする今日の社会問題や災害軽減等の課題を解決し、より良い社会を創造するうえでも、生涯学習で学んだ知恵の活用は欠かせないものとなっています。

富山大学地域連携推進機構生涯学習部門は、このような時代のニーズから、「誰でも、いつでも」学ぶことができるように、公開講座やオープンクラスの開設を中心に大学の持つ知的な資源を地域に開放する事業を展開しています。

さて、今回は、「災害が起きたらどうする？」と題して、大規模な自然災害についてご一緒にお考えいただく機会として熟議を開催いたしましたところ、ご多忙のなか、お集りいただきまことにありがとうございました。

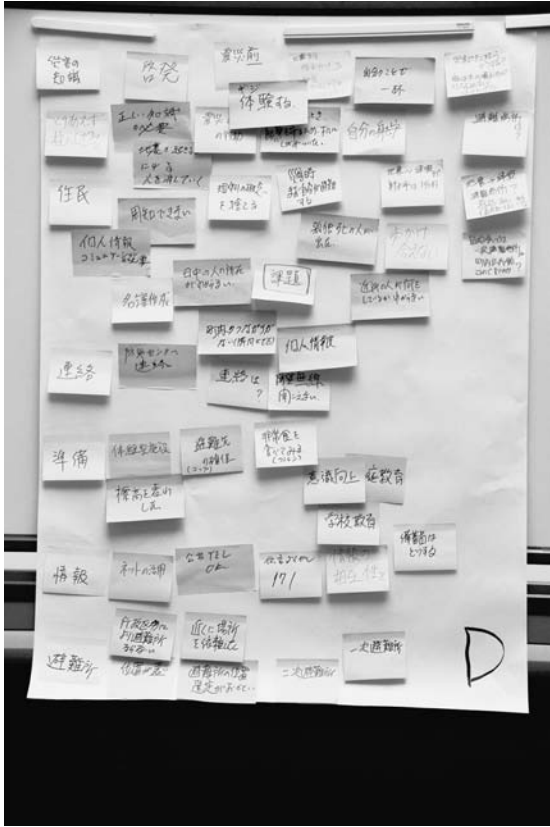
2011年3月11日に起こった東日本大震災と一連の原子力発電所事故は、きわめて甚大な被害を広範囲にもたらし、今なお多くの人々が困難にあえいでいます。生涯学習部門では、防災・減災についての意識変革が汎世界的な水準で拡大し始めているこの期に、地域社会の基盤を支える役割をもつ総合大学が果たすべき使命として、以下のような流れで地域の防災に関する取組みを行なってまいりました。

- ① 芝園小学校防災教育フォーラム（2011.8.30）
- ② ワークショップ「災害が起きたらどうなる？」（2012.2.25）
- ③ 熟議「災害が起きたらどうする？」（2012.7.7）

一般市民の防災・減災に対する関心は着実に高まりを見せており、大学の保有する知的資源を活用した取組みが一層強く求められています。そうしたニーズに応える形で81名もの参加者を迎えたこの熟議は、まことに意義深いものでありました。

今回の熟議は文部科学省が主唱する大学リレー熟議の一環でもあり、富山大学とともに熟議を共催した同省生涯学習政策局をはじめ、県内の自治体、NPO、生涯学習関連団体の皆さまには、多大な力添えをいただきました。心から厚く感謝申し上げます。実際に熟議に参加していただいた方々からの「反響」については、末尾に掲載したアンケート集計結果の通りです。今後も、全国各地で、このような取組みが質・量ともに広がり、防災・減災・復興の基礎となる地域力が醸成されていくことを願ってやみません。ともに手を携えて前進してまいりましょう。

当日は、竹内部門長の話題提供を受け、各グループに分かれ協議をスタートしました。今回は、「地域を考える」、「支援活動を考える」と二つのサブテーマを設け、協議を展開しました。協議内容は、最後に各テーブルごとに2枚の紙にキーワード（単文も有り）で集約して発表しました。



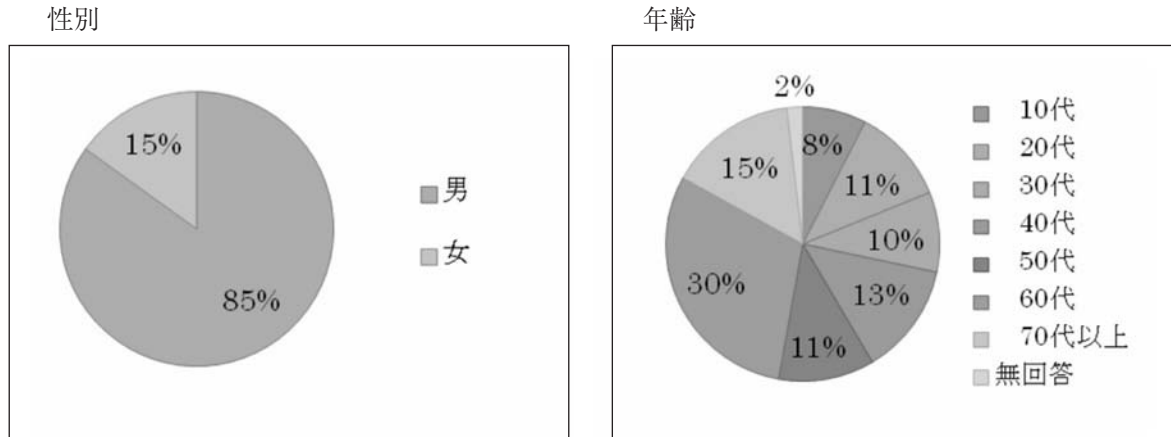
●参加者にアンケート調査を実施しました。

アンケート集計結果

参加者数 73人

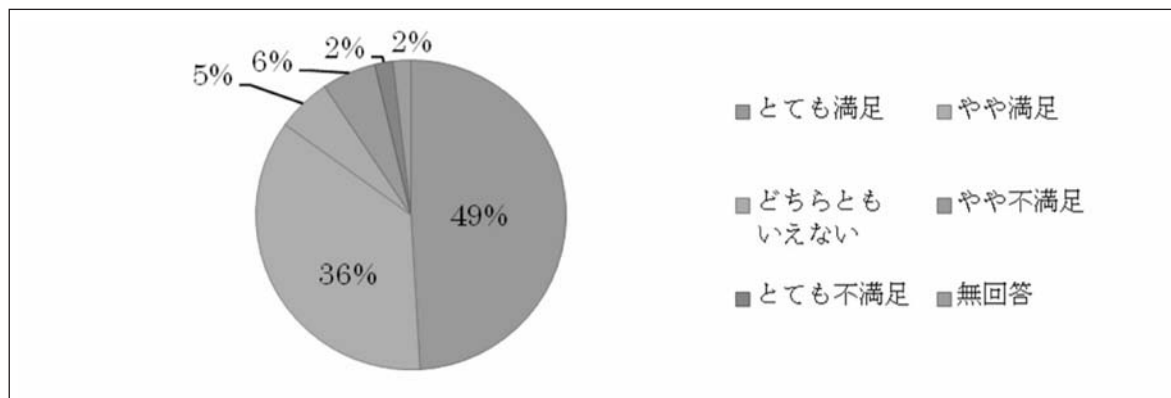
アンケート回答者数 53人 (回答率 72.60%)

【1】年齢と性別についておたずねします。(年齢は平成24年4月1日時点でご回答ください。)



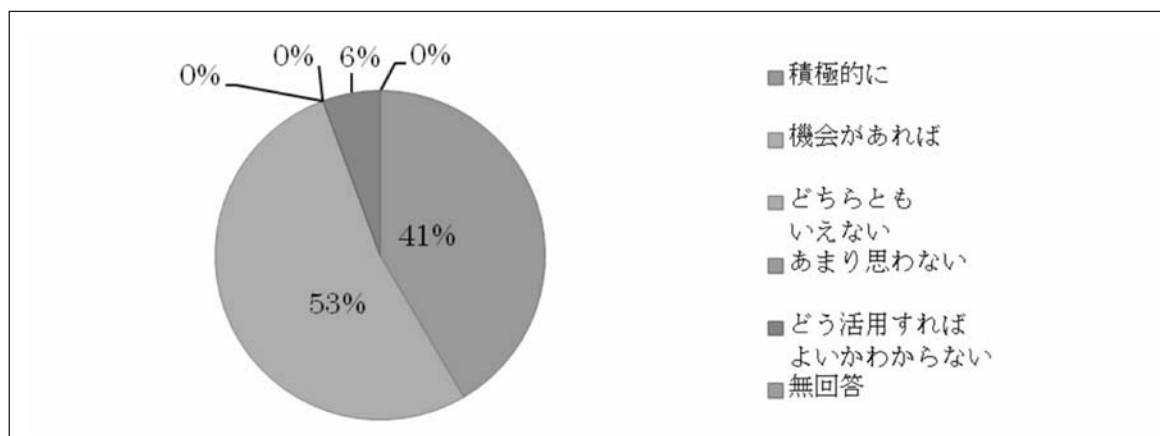
回答者の性別についてみると、男性が85%、女性が15%となっており、男性の参加者が多かった。また、参加者の年代をみると、10代が8%、20代が11%、30代が10%、40代が13%、50代が11%となっている。世代的にはほぼ均等であったと言える。

【2】本日の熟議の満足度についておたずねします。あてはまる番号に○をつけて下さい。



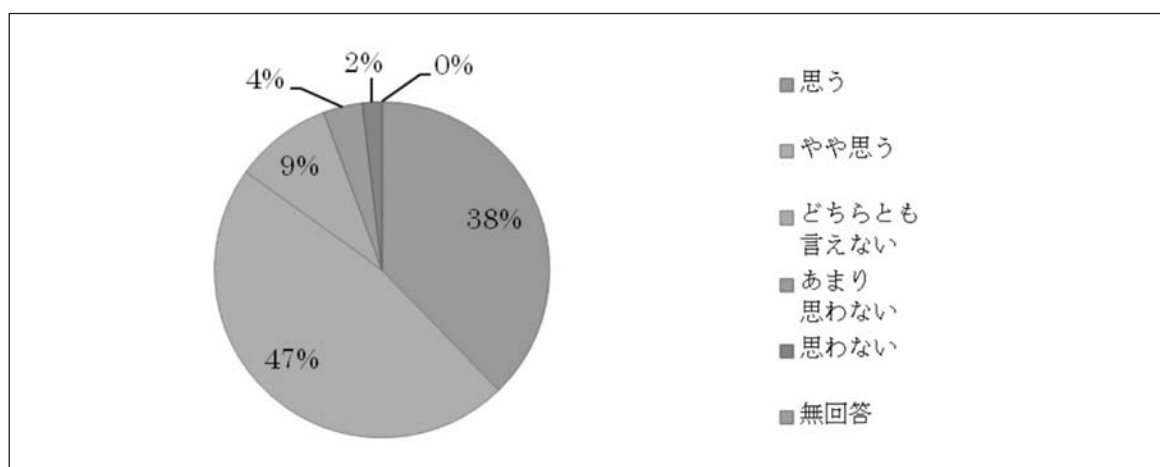
熟議の満足度についてみてみると、「とても満足」が49%と最も高く、「やや満足」が36%、「どちらともいえない」が5%、「やや不満足」が6%、「とても不満足」が2%、無回答が2%であった。「とても満足」と「やや満足」を合計すると85%に達しており、おおむね良好な評価が得られたと言える。

【3】 本日の熟議を今後の活動で活かしたいと思えますか？あてはまる番号に○をつけて下さい。



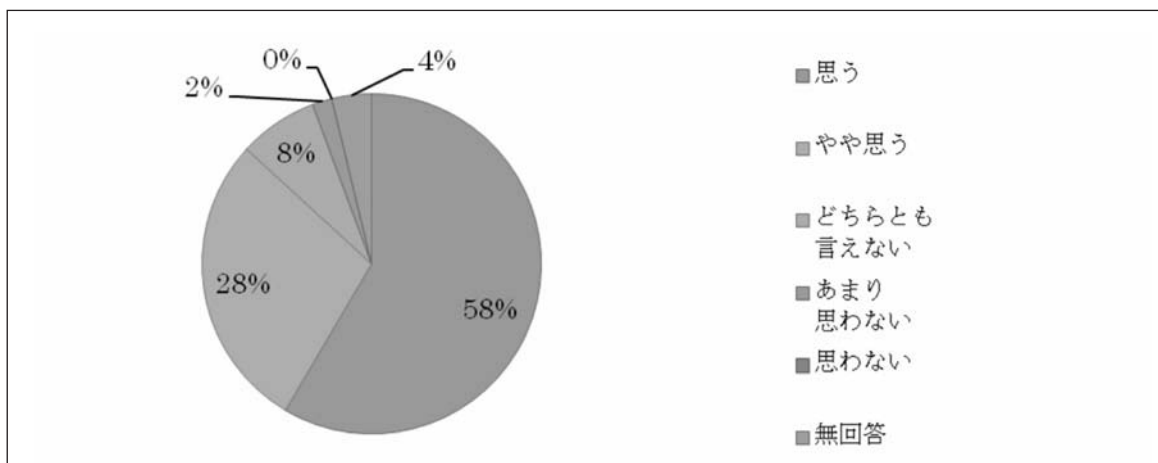
熟議を今後の活動に活かしたいかどうかについてたずねたところ、「積極的に」が41%、「機会があれば」が53%となっており、一定の波及効果があったことが認められる。なお、「どう活用すればよいかわからない」という意見も6%あった。

【4】 本日の熟議で災害に対する関心は高まりましたか？あてはまる番号に○をつけて下さい。



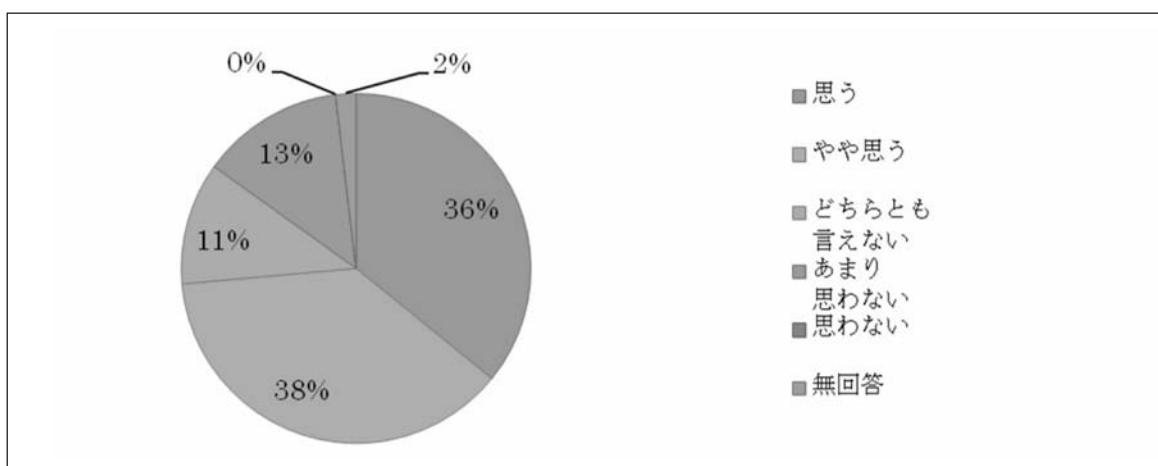
熟議を体験して、災害に対する意識が高まったと思うかどうかについてたずねたところ、「思う」が38%と最も多く、「やや思う」が47%、「どちらともいえない」が9%、「あまり思わない」が4%、「思わない」が2%であった。「思う」と「やや思う」を合計すると85%に達しており、災害に注意を向ける効果が高かったことが確認できる。

【5】 本日の熟議で参考になるコメントはありましたか？あてはまる番号に○をつけてください。



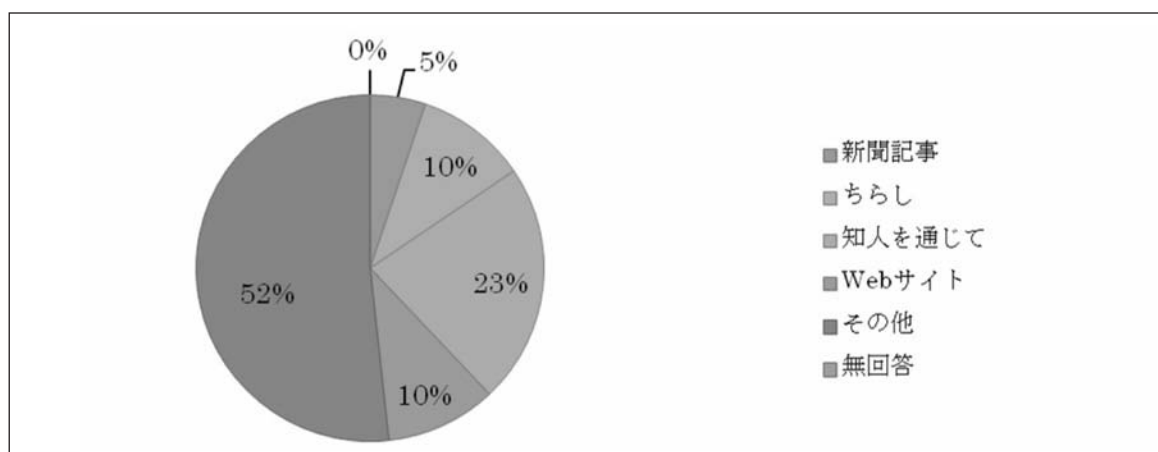
熟議を体験して、災害に対する理解が深まったと思うかどうかについてたずねたところ、「思う」が58%と最も多く、「やや思う」が28%、「どちらともいえない」が8%、「あまり思わない」が2%、無回答が4%であった。「思う」と「やや思う」を合計すると86%に達しており、災害についての啓蒙効果が高かったことが確認できる。

【6】 本日の熟議で災害に対するご自身の意見は変わりましたか？あてはまる番号に○をつけて下さい。



熟議を体験して、災害に対する自身の意見が変わったと思うかどうかについてたずねたところ、「思う」が36%、「やや思う」が38%、「どちらともいえない」が11%、「あまり思わない」が13%、無回答が2%であった。「思う」と「やや思う」を合計すると74%に達しており、災害に対する見方をゆさぶる効果が高かったことが確認できる。

【7】 本日の熟議はどのようにお知りになりましたか。あてはまる番号に○をつけて下さい。



今回の熟議をどのように知ったのか、その知悉方法についてたずねたところ、「新聞記事」が5%、「ちらし」が10%、「知人を通じて」が23%、「Webサイト」が10%、「その他」が52%となっていた。知人を通じて知った人が最も多く、口コミでの情報伝達に効果があったことがわかる。

●自由記述には多くの意見が寄せられました。

【8】 本日の熟議でどんなことに気づきましたか？自由にお書きください。

- ・本日のように、災害について平常時から話し合う事や考えることが大切であることを、身をもって感じた。これをやっている人とやっていない人はいざというときに差が出てくると思う。
- ・いろいろな様々な年齢・立場・経験をもった人たちが話し合い、うまれ出てくる知恵の貴重さ、受け入れる大切さを学びました。
- ・今（現在）の学生の状況。
- ・地域の人々が大学・大学生に何をしたいかがよく分かり、災害が起きたときの心構えができました。
- ・年齢層で考えていることが違っているということが分かりました。
- ・大人の方は結構災害について考えてはるんだなあ。
- ・一人一人の生きる力の大切さ。そこから地域の人々との協力が生まれるということ。
- ・情報伝達の手段でエリアメールの方法あり。地域にも広めてゆく努力をしたい。
- ・いろいろな意見が出され、参考になった。
- ・東北弁の「てんでんこ」が大切だと思いました。
- ・様々な立場の方と対話する中で、いろいろな角度からの見方を知ることができた。
- ・表面に出ていないことを討議してよかった。
- ・面白かった。
- ・富山県民の方々の災害意識がものすごく強い。
- ・いくら年齢幅が広くても、考える対策はほぼ同じ。
- ・大学と地域の連携が必要であると思った。
- ・もっと自分の住んでいる地域のことを知り、積極的に関わっていくことが大切だと感じました！
- ・自分を守り、家族を守ることが基本であることの認識を深めました。地域住民への防災意識を高めることが大切である。
- ・出席者の危機意識の高さに感心しました。日々活動で苦労されている事もよくわかりました。
- ・参加者の方々の防災に対する意識の高さを感じました。

- ・付箋での熟議は興味深かった。
- ・町内会として活発に取り組んでいる所がある。
- ・町内会活動にも温度差がある。(防災、その他も含めて)
- ・どの地域も、共通の悩みを持っていると思いました。(危機意識の薄さ、コミュニケーション不足等)
- ・活動のメインフィールド、世代での考え方のギャップを改めて自覚。
- ・防災意識の向上において、教育の必要性、体験学習の重要性。
- ・大学の地域との連携活動について、認識を新たにしました。
- ・皆さんが高齢化に感じられていることが一緒ということ。
- ・熟議の重要性に気付きました。
- ・他の地域での防災に対する取組みの実情がわかった。

【9】 本日の熟議で伝えきれなかった活動や考えはありましたら、自由にお書きください。

- ・災害（非日常的事象）対策のみならず、日常に起こる事象、救急車を呼ぶなど緊急時に対する備えについても、この活動の延長上で考えたい。
- ・大学における地域との連携を持たせる。
- ・50代位のひとが考えた防災についてのシステム（地域がどうこうみたいな）を強いるのは難しいと思う。それぞれ個々にあったシステムを考えるべきか？
- ・射水地域でも津波の意識が低かった。
- ・8月に起きてもいいように準備をする。
- ・大学生自身が考えている防災意識を発進（信）
- ・「否定しない！！強制しない！！丁寧に向き合う！！」という被災地でうまれた言葉を全国民へ理解していただけるようにする！！
- ・今日のような熟議が地域（校下単位）で開催できるのか。
- ・現在の災害復旧活動は町内会の会長がリーダーになることになっているが、消防団団員の現状と同じで高齢化が進んでいる。若者が参入出来るように小学生からの若い世代に防災と安全教育を働きかけてゆく必要がある。若者の安全や防災に対する意識が高まらないと今後の災害に対処できない。
- ・富山は災害の少ない県。一度中程度の災害が実際に起きれば県民の防災意識は深まる。今は無関心の人が圧倒的に多い。

【10】 熟議を受けて、今後どのようなことをやってみたいと思いましたか。自由にお書きください。

- ・公民館、民生委員の活動に関心をよせつづける（広報に目を通すなど）→地域を知る。
- ・被災地へ行く。
- ・災害に限らず、増税、社会保障他、タイムリーなテーマで熟議を継続したい。
- ・3日分の食料は備蓄しておこうかなあ・・・
- ・避難指示、勧告に備え、もちろん本当にあったときに備える。サバイバル・3日間に向けての取り組み。
- ・防災に対する準備を着実にやれる所から進めたいと思った。
- ・自分、家族の身は、自身で「てんでんこ」に実施したい。
- ・防災をテーマにした熟議だったが、仕事柄地域活動を行う方々をお話する機会が多いので、学んだことを伝えていけたらいいと思う。また、個人的にも防災グッズの準備をするなど、サバイバルに備えたい。
- ・もっと医学部からの発信が必要。
- ・災害ボランティアへの参加と地域との関わりをもつ。
- ・地域の活動に参加する。
- ・もっと震災に関する知識を勉強したい。避難訓練に参加したい。

- ・富山大学よりの防災関係学習会開催を考える。
- ・地域に帰って熟議を実施したい。
- ・個人の災害マニュアルを作りたい。
- ・自分の町内で防災組織を作る必要がある。
- ・町内会（校下）で防災訓練を行うよう町内会長に申し入れする。
- ・町内の一人暮らしの高齢者をどう避難させるかが課題である。
- ・自分の専門性を日常の継続的な防災に生かしていく。
- ・町内の防災活動で、大学の先生の講義など危機意識を向上させるようにしていきたい。
- ・地区に防災意識の向上をめざす。
- ・地域の防災組織の立上げ。

【11】 その他、ご意見・ご感想などありましたら、自由にお書きください。

- ・「熟議」について知らない人が多いと思うので、もっと広めて継続して行ってください。
- ・今の学生には将来性がある。日本の未来をたくすことができると感じました。
- ・いろいろなことを学びました。
- ・楽しかったです。
- ・色んな人の考えが聞けるのは、大変に面白い。
- ・話し合いが活発で、初対面の人達ばかりとは思えなかったです。自身の職業の面、経験の面から話して下さった方が多くて、学生の身分である私にとっては貴重な話ばかりでした。
- ・今回は学生と老人との対話の要素もありました。これは、老若の意見交換の視点からして成功と思う。できれば、もっと幅広い人々との協働作業に広まればと良いと感じた。
- ・学生よ。大学よ。もっと地域に目を向けて下さい。
- ・東北で得た経験から災害対応マニュアル(?)を成果物として作ってほしい。
- ・地域交流がされていない。もっと高度な情報発信が必要。
- ・今日は誠にありがとうございました。宮城県出身なんてこの場にはほとんどおられないと思うのですが、ぜひ皆さんへ来ていただきたいです!!そして、「もう1年たった!」ではなく、「まだ1年しかたってない!」のです!!
- ・いろんな世代の人と1つのことについて協議できて、とてもいい機会になったと思います。
- ・小学校、中学校、高校での熟議を実施されると良いと思います。子供の頃から危機意識を持つ事が必要と思います。
- ・テーマと結論が結び付いていないので大変やりにくかった。「災害時どうする」の副題がほしかった。
- ・富山大学で災害時（地震、水害、風害、原子力発電事故等に分類した上で）の災害復旧支援を含めて、復旧実行部隊運営のシステム研究をまとめてもらいたい。理論研究に終わらず（ケーススタディー研究を積み上げ）、大学内で、それから、中学・高校への出張授業等で実践していただきたい。そのことで将来的に防災意識の高い人々を養成出来、結果、本当の災害時には対応もしっかり出来ると思う。
- ・大学に対しての期待と公的機関への期待がまざっていた。大学はどのようなことができるのか、提示していただくと議論は深まったように思う。
- ・自分の考えにこだわり、議論の余地がない人がいて話がふくらまなかった。
- ・今回のように短時間の場合、置かれた状況が似た人で議論を深め、他の状況の人の発表を聞いて気付きの機会としても良いように思う。
- ・早く呉羽山断層の全容を明らかにしてほしい。
- ・断層に生きているもの（活断層）と死んでいるものがあるのですか。
- ・このような場に出てよかったです。また開いてください。

熟議を振り返って

今回の熟議では、アンケート結果でもわかるように幅広い世代層、様々な職業を持つ参加者 73 名（事前申込者 82 名）が、8つのテーブルに分かれ協議を進めました。

協議の手法は、ファシリテーターを中心に模造紙、付箋紙に発言を記しながら「災害が起きたらどうする？」というテーマで、午前から午後に渡り、協議を次の三つの内容に分けて行いました。①自己紹介で互いを知り、個々人の考えを述べ、②互いに意見交換する場とし、情報共有する、③「富山大学」というエッセンスを加えて再び今回のテーマを考えてみる、というものでした。最終的には2つのキーワードで報告して、会場全体で協議内容（情報）を共有する企画でした。

協議は和やかに進められたグループ、積極的に意見交換されたグループ等、様々でした。各グループ最終の協議では、大学への積極的な提言に到達していたグループもありました。

協議の時間も長時間でしたが、全体の 85% の参加者がほぼ満足とするアンケート結果でした。地方国立大学が「地域と共生する大学づくり」を進めていくためには、地域も大学もお互いにコミュニケーションが大切であるということは、今回の参加者の多くが感じたことでもあります。

今回の「熟議 2012 in 富山大学」の開催は、「熟議」形式も含め住民参加型の協議の場をつくること、今後も大学開放の方向性の一つとして重要であると示唆されるものです。

おわりに

熟議 2012 in 富山大学を無事開催することができました。

「災害が起きたらどうする？」という問いかけは、日本社会に生きる私たちにとって、とても身近なテーマになっています。3.11 東日本大震災以後、一年を経過して今なお多くの困難が未解決のまま残されています。被災地の復興へ向けて、また、身近な地域の防災・減災について、考え続けていかなければなりません。今回の熟議の試みはその姿勢を維持していくための力となれば、と願います。

実施にあたり、富山県内の自治体、生涯学習関連諸団体、いくつかの学校、NPO 団体の皆さまからは、実に多くのご助言・ご協力をいただきました。

地域と共生する大学づくりのための全国縦断熟議

「災害が起きたらどうする？」報告書 URL

<http://www.life.u-toyama.ac.jp/img/workshop201207report.pdf>

（富山大学地域連携推進機構生涯学習部門 HP 内）